

Charles K. Armstrong,

*The North Korean Revolution,
1945-1950.*

Ithaca and London: Cornell University Press,
2003, xiii + 265pp.

いそ さき あつ ひと
磯 崎 敦 仁

近年、北朝鮮研究の水準は飛躍的に向上している。分断国家の一方である韓国においては、第一次資料へのアクセス制限、反共イデオロギーによる研究の制約などに起因する「研究」分野の立ち遅れが指摘されてきた。しかし、民主化以降、とりわけ1990年代に入ってから全国の諸大学に「北韓学科」が設立され、北朝鮮研究を専門とする学会が発足するなど活発な動きを見せており、今やこの分野においては他国における研究を質量ともに凌駕しつつある。

一方、アメリカにおける北朝鮮研究も無視できない。従来、韓国系アメリカ人研究者が目すべき業績を残してきたが、最近では朝鮮語を解する若手研究者により、北朝鮮をとりまく国際環境を重視した未来展望のないし政策志向的な研究が積極的に進められている。政治体制研究の分野においても、その歴史的展開の検証を中心に次々と新たな成果が出されてきており、本書もそれら重要な業績のひとつに数えられる。

著者Charles K. Armstrongは、コロンビア大学歴史学部准教授兼朝鮮研究センター長を務めるとともに、昨年アメリカの主要大学における朝鮮半島研究者で構成されたASCK (Alliance of Scholars Concerned about Korea) の共同代表を担う等、顕著な活躍を見せている若手の現代朝鮮史研究家である。1994年に“State and Social Transformation in North Korea, 1945-1950”でシカゴ大学からPh.D.を

授与されており、本書はこの学位論文が土台になっている。執筆にあたりアメリカ、韓国および日本さらには北朝鮮においても研究活動を遂行し、北朝鮮現代史を語るうえで最も重要な時期のひとつといえる解放直後5年間の歴史を再構築しようと試みている。英語、朝鮮語、日本語の運用能力を駆使して先行研究の綿密な検討を行い、そのうえで第一次資料を十分に精査している様子が窺われ、論理の展開には十分な説得力がある。

本書で取り扱われているのは、解放前後から朝鮮戦争勃発に至るまでの時期における北朝鮮政治体制の諸側面である。文献の検討とインタビューという着実な研究姿勢で執筆された研究書であるが、理論的枠組みや時系列にとらわれることなく読者を飽きさせない努力が随所に垣間見られる。

本書の構成は以下のとおりである。

序 論

- 第1章 周辺における革命
- 第2章 解放、支配、新秩序
- 第3章 住民の観察
- 第4章 連携政治と連合戦線
- 第5章 経済計画
- 第6章 文化の構築
- 第7章 監視体制
- 第8章 人民の国家

結 論

第1章から第3章までは解放前から解放直後までの北朝鮮の姿が描かれている。

第1章「周辺における革命」は、1945年8月15日以前の朝鮮半島北半部と満州地域、とりわけ30年代における中国共産党東北抗日聯軍の活動に焦点を当てている。ここで活躍した者たちが解放後の北朝鮮において政治権力を掌握したことはいうまでもないが、さらにその結果として、「満州抗日パルチザンの歴史的経験」がそれ以後数十年にわたって北朝鮮の国内政治に深く影響したことが指摘されている。す

なわち、朝鮮半島から見て「周辺」である満州における革命が朝鮮民主主義人民共和国の基礎を作ったという意味で「周辺における革命」と題されているのである。

第2章「解放、支配、新秩序」においては、解放直後の1945年夏から翌46年冬までの約1年間の動きを追い、「事実上の北朝鮮体制」がソ連軍政の下で誕生した経緯を描いている。

第3章「住民の観察」においては、1946年の春から夏にかけて急進的に行われた極めて広範囲に及ぶ改革事業、すなわち社会的身分および階層の刷新、そして党と国家によって新たに主要な地位に取り込まれた小作農、労働者、女性および青年の「解放」について述べられている。著者は彼らの「解放」が植民地時代と比べて精神的、身体的自由をもたらしたとはいえない、として「疑わしき解放」(problematic liberation)と表現している。

第4章以降は、全体主義国家構築のために1945年から50年にかけてほぼ同時に生みだされ、その後の北朝鮮体制を特徴づけることになる新たなシステムについて分野別に検証されている。

第4章「連携政治と連合戦線」では、中央および地方における政治組織について扱われている。中央については、とりわけ朝鮮労働党、朝鮮民主党、天道教青友党の相互作用について述べられている。また、地方については人民委員会に焦点が置かれており、政治参加や選挙の状況についても触れられている。

第5章「経済計画」は、新たなレジーム下における経済計画と生産について解説を加えている。

第6章「文化の構築」では、北朝鮮国内のインテリ政策と文化の創造について述べられている。現在でもそうであるが、北朝鮮における「人民」は、労働者、農民、そして勤労インテリの3者によって構成されており、朝鮮労働党旗もこの3者を象徴したハンマー、カマおよびペンの組み合わせでデザインされている。北朝鮮ではソ連に対する主体性、優越性の一例として、「人民」の構成に「勤労インテリ」を加えたことを強調しているが、著者はこのようなインテリ重視の新たな文化の構築に焦点を当てている。

第7章「監視体制」では、地方レベルにおける警察の配備と監視体制の創設について述べられている。監視体制は、北朝鮮の人々の日常生活におけるあらゆる側面において政治権力の目を光らせるものであった。

第8章「人民の国家」は、1948年までの共和国成立過程と50年6月に朝鮮戦争を引き起こすまでの北朝鮮社会の軍事化過程を描いている。なお、第7章から第8章にかけては、金日成の抗日戦争の経験、すなわち日本の治安部隊に抗してきた経験が戦争遂行を可能とする大衆の動員と監視の体制を解放後の短期間で基礎付けたとされている点が興味深い。

本書の問題意識は、ソ連や東欧諸国の「人民民主主義」体制が崩壊し、中国およびベトナムが改革開放路線に進んだ現在、キューバとともに改革を行わないままのマルクス・レーニン主義体制を維持している北朝鮮体制の起源がどこにあるのかという点にある。著者はそのような問題意識に基づき、北朝鮮の社会主義体制形成過程における政治、経済、文化および社会の変容について考察し、独創的な見解を示している。

まず、共産主義への志向性が強い体制を構築するにあたり、ソ連の支援と影響を強く受けたにもかかわらず、極めて早い段階で共産主義の「固有化」を行った点が指摘されている。それは、東欧諸国に比べて農村社会を国の基盤とすることに由来する家父長制が根付いており、中国やベトナムと比べても儒教の影響が強いことから、身内志向を基礎にしたナショナリズムがすでに芽生えていたことに起因するという。これまで、とりわけアメリカ人研究者が、ソ連のコントロール下においてその体制が構築されたことを強調してきたのとは対照的である。

さらに、解放以前の歴史および政治文化の重要性が本書全体を通じて示されている。ソ連軍の早期撤退により、北朝鮮は中国や東欧といった他の新興社会主義諸国よりも独自の社会主義路線を歩むことができた。北朝鮮革命、とりわけ共和国の創建は必ず

しも自立的に達成されたものではないものの、土着の要素がそれを可能にしたとの見解である。ここにおいて著者は、朝鮮人が歴史から得た経験をもとに説明を加えている。

ソ連とスターリンに対する惜みない称賛の裏には北朝鮮のナショナリズムが隠れていた。当時の中国やベトナムもそうであろうが、植民支配との闘いにおいて物質的支援を与えてくれるほぼ唯一の国がソ連であった以上、国家社会主義は自国の解放および現代化にとって不可避の選択肢であった。それを可能としたのが、とりわけ李朝時代に築き上げられた儒教思想であったという議論が展開されている。つまり、家族や指導者、社会的慣習を重視するという朝鮮人の思考方式がソ連式社会主義の移植過程においてもそのまま残ったというのである。また、「明代以後の時期においても朝鮮半島では儒教を中心とした国家運営が続けられたように、ソ連崩壊後においても北朝鮮は社会主義を追求している」といった興味深い見解も見うけられる。

さらに、北朝鮮の新たな集団性の創造の試みについて触れられている。本書では労働者、貧農、女性、青年といったカテゴリーの創造や彼らに対する教育、意識付与のプロセスが扱われている。ここでは、この新たな「想像の共同体」が、インテリ層や政治指導者のみならず、解放の目的を認識し影響を受けた人々によって創造されたとされる。

以上で分かるように、本書は北朝鮮国内の権力政治そのものを扱ったものではない。これまで主たる研究対象とされてきた北朝鮮建国前後の派閥間権力闘争とは異なった視角から同時期における政治体制の分析を試みたものである。とりわけ第4章以降では、これまでの研究では見落とされがちであった、文化的側面に目を向け、ソ連からの影響とそこからの脱皮、すなわち主体性の確立について多くのページが割かれている。

著者は、北朝鮮のマルクス・レーニン主義に対するコミットメントは、東欧や中国およびベトナムの

それよりも強いものであったとして、建国期における金日成のイニシアチブを強調している。また、金日成はマルクス・レーニン主義と朝鮮固有の文化を結合させたことにより強固な体制を作り上げたとしているが、この点については鐸木(1992)ですでに指摘されているのと同様の論理である。そのような意味で、むしろ本書の特徴は、解放後における新たな「文化の構築」や、その後半世紀以上にもわたって国家統制の基盤となる「監視体制」について考察している点にあるといえる。政治体制の構造的側面や法的側面については解放直後の5年間に構築されたことが従来指摘されてきたが、先行研究はいずれも住民の生活を十分に描写してはいなかった。とりわけ「監視体制」については、Andrei Lankovらによっても研究成果[Lankov 2002]が出されているが、その資料的制約にもかかわらず本書では意欲的に扱われている。北朝鮮の人々の生活やその後の意識形成にとって重要な文化や社会という要素をこの時期の研究に採り入れたことは、今後の研究にも大きな影響を与えることになる。

本書の結論において最も印象的なのは、「金日成のリーダーシップは北朝鮮の『ソ連化』ではなく、ソ連共産主義の『朝鮮化』をもたらしただと指摘している点である。なぜ北朝鮮は現在も大幅な改革を行わないままマルクス・レーニン主義を固守しているのか、という根本的な疑問に対する著者の見解が凝縮された一文であるといえる。

また、はなはだ評者の個人的関心事ではあるが、本書では、北朝鮮の「文化」について儒教を除き、中国の影響についてはほとんど言及がない。今さら指摘するほどのことでもないかもしれないが、北朝鮮は、体制構造はもちろんのこと「文化」についてもソ連の影響を直接的に受けているが、中国の影響はほとんど受けていないのである。先日評者は、韓国への亡命者と北朝鮮の「文化」について話し合う機会を持ったが、北朝鮮の人々は今でもソ連・ロシアの諸文化にシンパシーを感じる一方で、中国の、とりわけ大衆文化には全くといってよいほど興味を示さないという。「文化」を過度に重視する金正日が父親にも増してロシアとの友好関係を強調している

のは、必ずしも中国との天秤掛けといった国際政治の論理だけから来るものではないのではなかろうか。

北朝鮮は、金日成と金正日という父子関係にある最高指導者が半世紀以上にわたって統治してきた現代史上唯一の社会主義国家である。社会主義体制における世襲については、シリアのアサド大統領父子の経験を例に出すこともできるが、その閉鎖性や硬直性は北朝鮮のものとは比較にもならない。現代における北朝鮮政治体制の無謬性が半世紀以上も前から培われてきたことに鑑みれば、同国を真に理解しようとする際に解放直後からの歴史的展開をつぶさに観察する必要があることはいうまでもない。

著者は、朝鮮戦争期に米軍によって捕獲されたいわゆる「北朝鮮捕獲文書」の精査を本書執筆の基礎としている。これら国立公文書館所蔵の資料については、韓国の研究者はもちろんのこと、日本でもすでに萩原遼や和田春樹らによって朝鮮戦争の開戦に焦点を置いた綿密な検証がなされてきた〔萩原1996；和田2002〕。それらの重厚な先行研究に挑戦するかのごとき著者の文献に対するこだわりは、本書の注釈部分によく滲み出ているものの、「捕獲文書」は北朝鮮の共産主義者の手によって書かれたものが大部分であるため、それだけではソ連、スターリンと金日成の関係を正確に描写するのは不可能ではないかと思料される。著者は、金日成はソ連式全体主義を独自の方法で北朝鮮に適應させたことにより、スターリンよりもさらに極端なスターリン主義を確立してしまった、としているばかりか、金日成が必ずしもソ連の「傀儡」ではなかったとまで述べている。非常に興味深い指摘ではあるが、これらの点についてはロシア側の資料を十分に検証したともいえず、やや資料的な実証が弱い感否めない。しかしながら、そのことが本書の価値を減ずるものだとも言い難い。北朝鮮研究で最も大きな障害となっているのは、現在でもやはり第一次資料の不足であり、現段階において最も有用な「捕獲文書」を精査している点で、本書における論証が不十分であった

ともけっしていけないからである。

本書は、現在までに蓄積された先行研究を十分に消化し、さらに文化、社会という視角を取り入れることに成功している。著者自身はあまり強調していないが、むしろそのことが本書の価値を高めている。本書は、解放直後期北朝鮮政治の研究における最先端であるばかりか限界点かもしれない。この分野で本書を超えようとするならば、将来の体制崩壊ないしは体制改革に伴う資料の流出を待つのが最善の方途かもしれないと思うほどである。また、長年にわたり日米韓の研究者が取り組んできた解放直後期、いわば朝鮮民主主義人民共和国の形成期に関する研究は、本書をもって質量ともに十分なものになったといえる。今後は別の時期における北朝鮮の諸側面を解明したり、異なる視角によってその体制を分析する必要があろう。

本書は、アメリカにおける北朝鮮研究の新たな前進であることはもちろんのこと、日韓を含む国際レベルにおいても高い評価を受けるべき研究成果であり、今後北朝鮮研究を目指す者にとっては避けて通れないものとなる。負担が増えた分、やりがいも大きくなったというところであろうか。

文献リスト

<日本語文献>

- 鐸木昌之 1992. 『北朝鮮 社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会.
 萩原遼編集・解説 1996. 『米国・国立公文書館所蔵北朝鮮の極秘文書 1945年8月～1951年6月』全3巻 夏の書房.
 和田春樹 2002. 『朝鮮戦争全史』岩波書店.

<英語文献>

- Lankov, Andrei 2002. *From Stalin to Kim Il Sung: The Formation of North Korea 1945-1960*. London: Hurst.

(慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程)